

タイトル	語の派生と内部構造について : coeducationの派生と逆形成の観点から
著者	上野, 誠治; UENO, Seiji
引用	北海学園大学人文論集(67): 125-144
発行日	2019-08-31

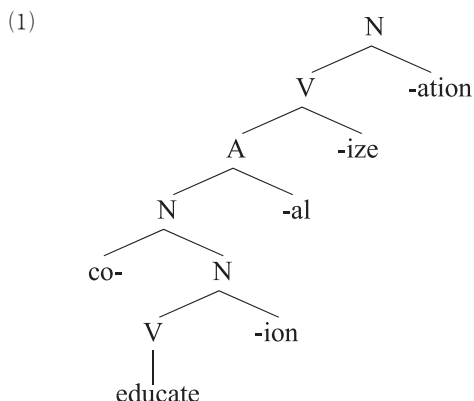
語の派生と内部構造について

— coeducation の派生と逆形成の観点から —

上 野 誠 治

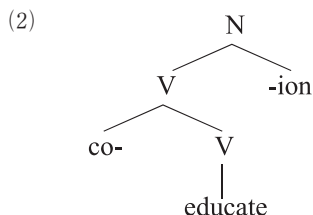
0. はじめに

竝木 (2009 : 6) は, coeducationalization の構造について, 下に示す(1)のような派生と内部構造を例示し, 「英語には educate (「教育する」の意味, 以下「」は省略) という動詞があるが, それに-ion という接尾辞を付けると education (教育 (すること)) という名詞ができる。この名詞に co- (共に, 一緒に) という接頭辞を付けると coeducation (男女共学) という単語ができる。(以下略)」と述べている¹。



¹ 竝木 (2013 : 36) には, coeducation の内部構造を樹形図を使って書く設問があり, その模範解答には同様の構造が提示されている。しかし, それ以外の構造の可能性 (例えば, (2)) については特に言及はない。

すなわち, coeducation の形成には, 2 つの接辞 (affix) のうち, 接尾辞 (suffix)-ion が最初に付加され, その後に接頭辞 (prefix) co-が付加されており, (2)のようなその逆順により生じる構造は想定されていない²。



(2)に示される内部構造は, 最初に動詞 educate に接頭辞 co-が付加されて形成された動詞 coeducate (〈人に〉男女共学の教育をする³) に接尾辞-ion が付加されるという一連の派生 (derivation) による語形成を反映したものである。

本稿は, coeducation の派生をめぐって, その内部構造が何故(2)ではなく(1)の coeducation の部分であるのか, そのことは自明なのか否か, また, (2)はまったく容認されない構造なのか否か, を再検討することを主たる目的としている。第 1 節では, coeducation に関する議論に先立って, 接頭辞 un-および co-が付加されうる基体の種類を確認する。第 2 節では, 語の多義性について検討し, 多義の場合にはそれが別個の構造に反映されることを見ていく。続いて, 第 3 節では, 派生を決定する要因となりうる接辞の類別について考察し, 特に co-がいずれのクラスに分類されるのかを検討する。第 4 節では, 解釈と構造の関係を考察し, coeducation が 1 つの解釈しかないことを確認する。第 5 節では, coeducate が coeducation からの逆形成 (backformation) であることを踏まえて, 想定されうる 2 つ

² 以下, 樹形図において, N は名詞 (noun), V は動詞 (verb), A は形容詞 (adjective) を表す。

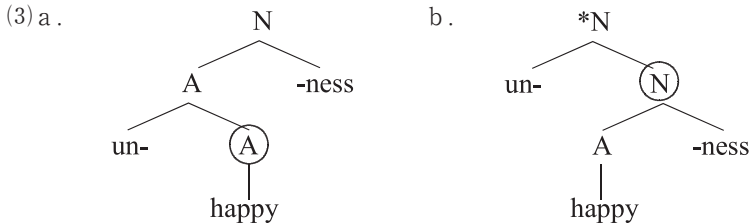
³ 『小学館ランダムハウス英和大辞典』第 2 版 (1994) による。

の派生の関係を考察する。第6節はまとめである。

1. 接辞と共起できる基体の種類

1.1. 接頭辞 un-

まず、接頭辞や接尾辞などの接辞が付加される対象である基体（base）の種類には一定の制約があることが知られている⁴。例えば、un-は一般的に形容詞に付加することは可能（unkind, unbelievable など）であるが、*unsystem や *Uncola などの語が存在しないことから、名詞に付加することは基本的に許されない⁵。したがって、unhappiness という語に対して、(3)に示される2つの派生を想定することが可能であるが、この場合は、前述したように un-は名詞に付加されないという制約によって (3b) の派生を阻止することができる。

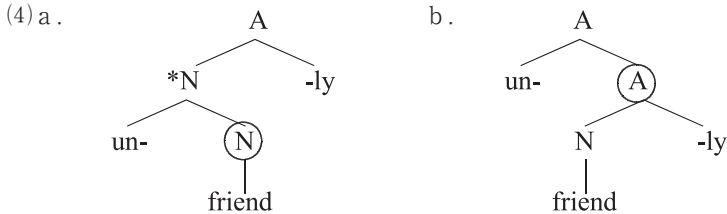


また、Justice (2001:88) が指摘するように、unfriendly という語には、以下の2通りの派生が考えられるが、正しい派生は (4b) である。なぜな

⁴ base は「語基」と和訳されることもある。

⁵ *unsystem と *Uncola は Fromkin et al. (2007:86) からの例である。また、語に付与されているアステリスク (*) は、その語が実在しない、あるいはその派生が容認されないことを示す。それは偶然の空所 (accidental gap) というのではなく、語形成に課せられる一般的制約のために、英語では許容されないということである。

ら, (4a) の派生を想定すると, un-が名詞に付加された *unfriend が派生の途中で形成されてしまうからである。しかし, *unfriend は実在する語ではない⁶。(4a) の構造は, *unfriend という実在しない名詞に接尾辞-ly が付加されて unfriendly が形成されることを表示するものだが, 実在しない名詞は定義上形態素にはなれないはずである⁷。



以上, (3), (4)のいずれにおいても, un-が名詞に付加される構造は許されないことが分かる⁸。

同様に, Weisler and Milekic (2000 : 85) は, undrinkable という語に関して, もし un-が動詞 drink に付加されると *undrink という語形が形成されてしまうが, それは実在の語ではない⁹。したがって, 最初に-able が

⁶ *unfriend が名詞になるのは, 「形態的に複雑な単語 (つまり派生語と複合語) の主要部はその単語の右側の要素である」という右側主要部の規則 (The Righthand Head Rule) により, 右側にある friend が主要部であり名詞であるためである (三原・高見 2013 : 50)。

なお, friendly, namely などの語が実在することから, 名詞に接尾辞-ly が付加されること自体には特に問題はない。

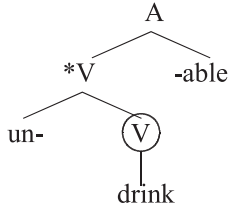
⁷ 形態素は「意味を有する最小の単位」と定義することができるが, 実在しない語には当然意味はない。

⁸ unemployment (失業), unfaith (付信仰), unrest (不安) などは, 例外的に un-が名詞に付加されて, 「…の欠如, …の逆」の意味を表している (寺澤 1997 : 1480)。

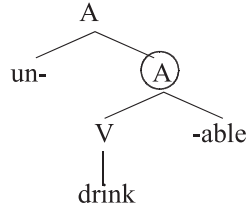
⁹ untie, undo などの語が実在することから, 動詞に接頭辞 un-が付加されること自体には特に問題はない。

drink に付加されて形成される形容詞 drinkable に un- が付加される、と述べている¹⁰。したがって、undrinkable の構造として正しいのは (5b) の方である。

(5) a.



b.



1.2. 接頭辞 co-

それに対して、接頭辞 co- は、以下の例に見られるように名詞、動詞、形容詞のいずれの品詞の基体とも結合可能である。したがって、基体の品詞に課せられる制約に限れば、co- は(1)のように名詞 education にも、また(2)のように動詞 educate にも付加することは可能である。

(6) a. 名詞 coauthor

b. 動詞 cooperate

c. 形容詞 coessential

(大石 1988 : 34)

また、派生の途中で形成される education, coeducate は共に実在する語であるから、「派生の途中で形成される語が実在しない場合、その派生が破綻する」という仮説だけでは、(2)の派生を阻止することはできないと思われる。

したがって、coeducation の派生に関しては、co- が共起できる基体の種類に課せられる制約からも、また派生途中の語の実在・非実在の相違から

¹⁰ -able はその基体として動詞を選択するので、動詞 drink との結合はまったく問題ない。

も、(2)の派生を排除することは出来ないことになる。

なお、(2)で最初に形成されると仮定されている動詞 coeducate は、『ジーニアス英和辞典』第 5 版 (2015), 『ウィズダム英和辞典』第 4 版 (2018) などの中辞典には記載されていないが、『小学館ランダムハウス英和大辞典』第 2 版 (1994), 『研究社英和大辞典』第 6 版 (2002) には記載がある。しかし、大辞典であっても、*The American Heritage Dictionary of the English Language*. Third edition (1992) や『ジーニアス英和大辞典』初版 (2001) にその記載はない。

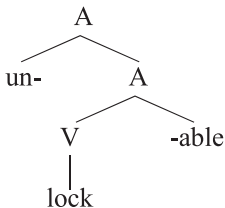
以上のことから、coeducate は動詞としてはあまり一般的ではないことがわかる。また、*Oxford English Dictionary*. Second edition on CD-ROM Version 4.0 (2009) や『研究社英和大辞典』第 6 版 (2002) によれば、coeducate は coeducation からの逆形成による造語とされており、語形成の順序としては coeducate より coeducation の方が先ということになる。逆形成については第 5 節で詳しく論じたい。

2. 語の多義性

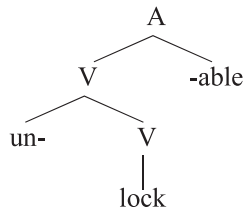
前節では、2つの派生と構造が想定される場合、どちらか一方のみが正しく、もう一方は何らかの理由で排除される、ということを見た。本節では、2つの派生と構造の両方が容認される場合について考察する。

Fromkin et al. (2007 : 86) は、unlockable という語が 2 通りの解釈を持ち、次のような 2 つの構造に対応すると述べている (一部改変)。

(7) a.



b.



(7a) は lockable（施錠可能な）が un-によって否定されるため「施錠不可能な（not able to be locked）」の解釈となる。他方、同じ unlockable でも、(7b) のように unlock（解錠する）に -able が付加されると、「解錠可能な（able to be unlocked）」という解釈にもなりうる¹¹。unlockable は(7)に示される 2つの構造を持つことが可能で、それぞれ異なる解釈に対応している。もちろん、派生途中の lockable も unlock も実在する語なので、それぞれ形容詞と動詞の構成素（constituent）を構成することにも何ら問題はない¹²。

ここで重要な点は、unlockable が {un-}, {lock}, {-able} という 3つの形態素から構成される点は同じでも、その結合の仕方が異なるため、結果的に異なる階層構造（hierarchical structure）が想定され、それに 2つの解

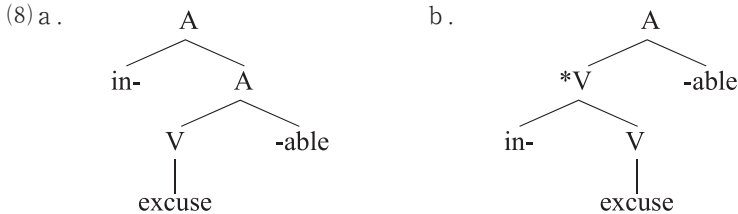
¹¹ lockable, unlockable などの訳語は、フロムキン他（2006）による。

¹² 次節で検討する 2種類の接辞の観点から見ると、un-はクラスⅡ接辞、-able はクラスⅠ接辞である（大石 1988：39-43）。後述するように、一般的に、クラスⅠ接辞がクラスⅡ接辞より内側に付加されることが正しいとすれば、unlockable の本来の構造は、(7a) ということになる。一方で、*Oxford English Dictionary*（2009）によれば、unlock の初出は 1400 年頃と早く、一つの動詞として定着してしまったため、それに -able が付加され「解錠可能な」という意味の unlockable が形成されたものと考えられる。この場合、クラスⅠ接辞の -able がクラスⅡ接辞の un-の外側に位置することになる。こちらが本来の意味なのであろう。ただし、-able はクラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞の両方に分類される可能性も指摘されている（大石 1988：51）。unlockable の場合、unlock に -able が付加されても第一強勢が移動するといった変化は観察されないで、この時の -able はクラスⅡ接辞に分離されるべきなのかもしれない。そうすれば、un-も -able も共にクラスⅡ接辞となり、(7)の構造はいずれも容認される。

なお、同辞典には unlockable に対して、「1993 年の追加」として「施錠不可能な」（‘That cannot be locked (in senses of the vb.)’）の語義が示されているが、その意味での初出は 1934 年となっている。したがって、unlockable は通時的には (7b) のあとに (7a) の意味でも使われるようになったものと考えられる。

釈が対応することである。すなわち、2つの解釈があれば2つの異なる構造があるのである。

しかし、いつも異なる構造が容認されるわけではない。例えば、inexcusable は1つの解釈しかないが、理論的には次の2つの構造が想定できる。しかし、解釈が1つである以上、正しい構造は一方のみでなければならない。この場合、正しい構造は(8a)の方である。なぜなら、前節で述べたように、(8b)のような派生の場合、途中で *inexcuse という実在しない動詞が形成されてしまうからである(小野 2004: 60)。



3. クラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞

大石(1988: 37-38)は、Siegel(1974)などを基に2種類の接辞(クラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞)を区別する特徴を次のようにまとめている。

- (9) a. クラスⅠ接辞は強勢の位置決定に関与し、付加されると基体の第一強勢の移動を引き起こしうる。クラスⅡ接辞は強勢の位置決定には関与せず、付加される基体の強勢の移動を引き起こさない。
- b. クラスⅠ接辞は基体または接辞において音変化を引き起こしうるものであるのに対し、クラスⅡ接辞は音変化を引き起こさない。
- c. クラスⅠ接辞はクラスⅡ接辞より「内側」に付加され、その逆にはならない。
- d. クラスⅠ接辞は語より小さい形態素に付加されることがあるが、クラスⅡ接辞は(少数の例外を除き)いつも語に付加される。

- e. 接頭辞だけに見られる特徴として、クラスⅡ接辞と基体とは因数分解関係にある。
- f. クラスⅡ接辞は複合語に付加することができるが、クラスⅠ接辞は複合語には付加されない。

例えば、(9b) に基づいてクラスⅠ接辞に分類される否定を表す接頭辞 in-は後続する基体の最初の子音によって、以下のような変化をする（竝木 1985：19-20）。

- (10) a. in-decent → indecent
- b. in-legal → illegal
- c. in-material → immaterial
- d. in-possible → impossible
- e. in-regular → irregular

(10)の a の in-には特に変化は生じていないが、b, c, d, e では、いずれもが後続する子音と同化（assimilation）している。また、b, c, e ではその際、子音の脱落を伴っている。例えば、子音が脱落しない impossible とそれが脱落する immaterial を比較すると次のようになる。後者で、[m] 音が同化によって連続したとき、一方が脱落している。

- (11) a. in-possible [in-pásəbl] → impossible [impásəbl]
- b. in-material [in-məti(ə)riəl] → immaterial [im-məti(ə)riəl]
 → [iməti(ə)riəl]（[m] 音の脱落）

次に、以上を踏まえて、coeducation を構成する接頭辞 co-と接尾辞-ion が、それぞれどちらのクラスに分類されるのかを検討する。

まず、接尾辞-ion については、以下の特徴が観察される。いずれの場合も基体の語末の [t] が [ʃ] に音変化しており、加えて最後の educate では

第一強勢の位置が第 1 音節から第 3 音節に移動している。したがって, -ion はクラス I 接辞と考えると良い¹³。

- (12) a. act [ækt] → action [ækʃən]
 b. complete [kəmpli:t] → completion [kəmpli:ʃən]
 c. pollute [pəlu:t] → pollution [pəlu:ʃən]
 e. educate [édʒukèit] → education [èdʒukéiʃən]

他方, 接頭辞 co-は, coauthor, coeditor, copartner, coworker などに見られ, 寺澤 (1987: 243) によれば, co-は com-に等しく, com-が変化したものである。これは表面的には形態の変化であるが, 同時に音変化でもある。形態が異なれば必然的に音も変化するからである。

寺澤 (1987: 252) は, com-の変化について以下のように説明している。

- (13) a. 通例 b, p, m などの前ではそのままの形 com-
 b. l の前では col-, r の前では cor-
 c. 母音および h, gn, w などの前では co-
 d. その他の場合は con-

そうすると, 例えば coauthor や coworker は, 通常 co-author, co-worker のように, 接頭辞 co-が付加された語として分析されるが, 以下に示すように, 本来は接頭辞 com-が接続されたものであり, (13c) によって母音や [w] 音の前で co-に変化したものと考えられる。それと同様に, co-education の場合も母音 (education の第一音節の [e]) の前で com-が co-

¹³ O'Grady and Archibald (2012: 114) でも -ion はクラス I 接辞に分類されている。その際, 例として nation を挙げ, nat-ion のように形態素分析をし, 本文と同様に [t] から [ʃ] への音変化を指摘している。また, 音変化の比較としては, native [-t-] 対 nation [-ʃ-] の例を提示している。

に変化したと考えられる。

- (14) com-author → coauthor
 com-worker → coworker
 com-education → coeducation¹⁴

従来、co-はcom-の変異形であるとの認識はあったものの、(6)で確認したように、比較的自由に基体と結合できるため、どちらのクラスに分類されるのかあまり明確に述べられてこなかったように思われる。しかし、in-と同様にcom-も後続する基体によって(13)のように形を変え、音を変化させることから、com-およびその変異形であるco-もまた共にクラスⅠ接辞に分類されると思われる。

以上、本節では、coeducationを構成するco-および-ionは共にクラスⅠ接辞であることを確認した。もし、その2つの接辞が異なるクラスに分類されていれば、(9c)の基準を用いて、基体educateにまずクラスⅠ接辞が付加されたあとクラスⅡ接辞が付加されたと分析され、coeducationの内部構造を一義的に決定できたはずだが、実際は共にクラスⅠ接辞に属するという主張が正しいければ、この接辞の2分類では説明ができないことが判明した。

4. 解釈と構造

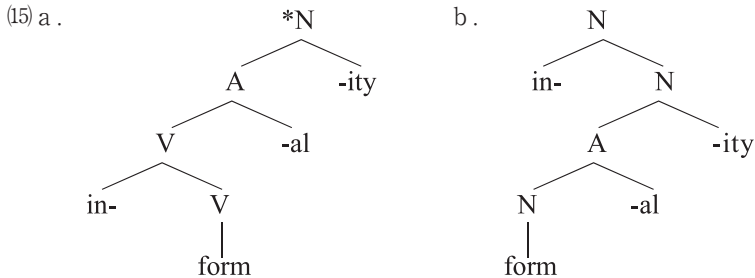
第1節では、co-が名詞および動詞のいずれにも付加されうることから、派生の途中で、実在するcoeducation, coeducateを含む構造は、co-の共起制限のみではどちらも排除できないことを見た。また、第3節では、co-も-ionのいずれも、同じクラスⅠ接辞に分類されることから、接辞が付加

¹⁴ 便宜上、com-あるいはその変異形のco-が名詞educationに付加されたものとして分析する。

される順序の違いからも一方の構造のみを容認し、他方の構造を排除するということができないことを確認した。しかし、単にどちらの構造も容認されると結論付けることはできない。なぜなら、第 2 節で考察したように、2 つの構造が容認されるのであれば、unlockable の例で見たように、その 2 つに解釈の違いがなければならないからである。しかし、coeducation に 2 つの解釈はない。

4.1. informality の派生と解釈：2 種類の in-

Brinton and Brinton (2010: 99-100) は、informality という語に関して、次の 2 つの派生の可能性を指摘し、(16) のように述べて、informality の派生として妥当なのは、(15b) であると主張している。



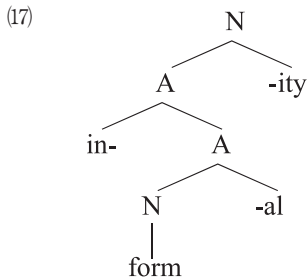
- (16) While neither derivation produces a nonword, the reason for preferring the second derivation in this case semantic. *Informality* means ‘not having the quality of form’ and is related to the noun *form*. It is not related to the verb *inform*, which does not contain a negative prefix.

ここで述べられているように、どちらの派生においても実在しない語は産出されていない。また、接辞の共起制限についても詳細は省くが、まったく問題がない。にもかかわらず、一方の構造のみが正しいとされるのは、

意味的（semantic）な理由からである、と指摘している。

informality は「本式（正式）でないこと、形式張らないやり方」という意味であるから、この場合、接頭辞 in-は否定の意味を表すことは明白である¹⁵。それに対して inform の in-は「中に（へ）」を表し、inform の原義は「（心・頭の）中に（in）形作る（form）→話を形作る→知らせる」である¹⁶。したがって、informality は前者の意味を反映した（15b）の構造を持つと考えられる。

ただし、Brinton and Brinton (2010) は議論していないが、次のような第3の派生の可能性も考えられるであろう。



なお、(18)に示すように、-ity を付加すると、第一強勢が移動したり、[k] から [s] への音変化が見られることから、in-も -ity も共に同じクラス I 接辞に分類されるため、ここでもクラスの分類の違いに基づいて(17)を排除することはできない¹⁷。

¹⁵ informality の意味は『研究社英和大辞典』第6版（2002）による。

¹⁶ inform の原義は『ジーニアス英和辞典』第5版（2015）による。

¹⁷ 否定の in-については、第3節で見たように、クラス I 接辞である。また、「中に（へ）」を表す in-についても、同様に後続する基体と同化することから（import, illuminate, impose などのように）、クラス I 接辞であると見なして良いと思われる。また、-al についても、adjective→adjectival に見られるような第一強勢の移動が観察されるためクラス I 接辞と考えられる。

- (18) a. elástico → elasticity (大石 1988 : 39)
b. elástico [k] → elasticity [s]
tóxic → toxicity
eléctric → electricity (大石 1988 : 44, 強勢の加筆は筆者)

(17)では、名詞 form に接尾辞-al が付加されてできた形容詞 formal に否定の接頭辞 in-が付加され、最終的に名詞 informality が派生することが示されている。informal の原義は「正式 (form) の (al) ことでない (in)→非公式の」であるから、意味的に(17)の構造を排除することはできないと思われる¹⁸。

また、*Oxford English Dictionary* (2009) には、以下のように informality の語義が記載されているが、ここには大きく分けて、2つの意味が提示されているように思われる。1つは「非公式である (informal) という性質または事実」で、もう一つは「形式 (formality) の欠如」である¹⁹。

- (19) ①The quality or fact of being informal; ②absence of formality; with *an* and *pl*. An instance of this, an informal act or proceeding.
(①②の加筆は筆者)

そのように考えれば、前者の意味は(17)の構造に、後者の意味は Brinton and Brinton (2010) が想定している (15b) に対応するものと考えられる。

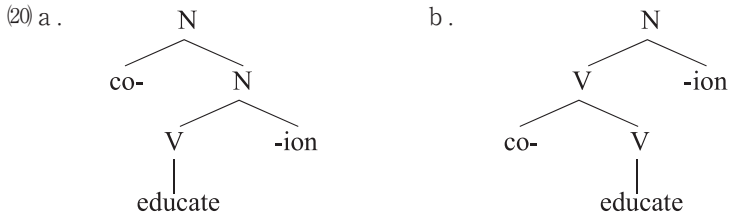
4.2. coeducation

次に、coeducation の場合に立ち返ると、その語を構成する接頭辞 co-も

¹⁸ informal の原義は『ジーニアス英和辞典』第 5 版 (2015) による。

¹⁹ この「形式 (formality) の欠如」と Brinton and Brinton (2010) が述べている informality の意味 (not having the quality of form 形式の性質を持たないこと) は、ほぼ同じ意味内容であると思われる。

接尾辞-ity も共に前節で確認したように、クラス I 接辞に分類されるため、(9c) に基づいてどちらが先に付加されるかを決定することはできない。また、co-が先に付加されてできる動詞 coeducate も、-ion が先に付加されてできる名詞 education も共に実在する語なので、語の実在・非実在を基準にいずれかの可能性を排除するということもできない。したがって、理論上、次の2つの派生が可能である。



また、informality の派生を考察した際には、in-が多義であったため、2つの派生の可能性が考えられるとしても、意味的な観点からその1つを排除することができたが、co-は以下に示すように、基本的には同じ意味を表していると思われるので、意味の違いから一方を排除することはできない。したがって、(20)に示した2つの構造は共に容認されると思われる²⁰。しかし、実際のところ coeducation には1つの解釈しかないため、2つの構造は必要ないことになる。

(21) coeducate

To educate (persons of both sexes) together, or (one of either sex) with those of the other under a co-educational system.

²⁰ (21), (22)の語義は *Oxford English Dictionary* (2009) による。この中で 'together' が共通して出てくるが、それが co-の意味（共に、一緒に）に由来することは明らかである（竝木 2009 : 6）。

(22) coeducation

Education of the two sexes together in school or college.

ただし、*Oxford English Dictionary* (2009) や『研究社英和大辞典』第 6 版 (2002) の動詞 *coeducate* の項には、それが^s *coeducation* からの逆形成との指摘がなされている。*Oxford English Dictionary* によれば、*coeducate* の初出は 1855 年であるのに対して、*coeducation* はそれよりも少し早い 1852 年である。そうすると、*coeducation* に先だって *coeducate* を想定しなければならない (20b) は、歴史的な、すなわち通時的な (diachronic) 観点から見ると不適当と言えるかもしれない。しかし、共時的な (synchronic) 観点に立てば、*coeducate* という動詞が実在する以上、(20b) を一概に排除することもできないと思われる。ただし、実在するといっても、*coeducate* を記載する辞書は一部の大辞典に限定されている。

5. 逆形成と再分析

O'Grady and Archibald (2012 : 109) は、*unkempt* (〈髪が〉くしを入れない、〈服装・外見など〉手入れのしてない) と *kempt* (〈髪など〉くしを入れた) について、興味深い指摘を行っている²¹。それによると、*unkempt* は、否定の接頭辞 *un-* と「手入れした (*groomed*)」という意味の *kempt* から構成されるが²²、*kempt* 自体は単独では用いられない拘束形態素 (bound morpheme) であり、したがって定義上、語ではない。しかし、*kempt* (「くしでとかした (*combed*)」) はかつては英語の中に存在しており、その当時に *un-* が付加されて *unkempt* が形成されたが、その後 *kempt* は廃用となり、*unkempt* だけが残された、と述べている。

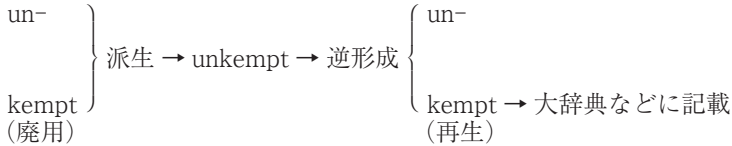
しかし、いったん廃用になった *kempt* が一部の大辞典に限定されてい

²¹ *unkempt*, *kempt* の語義は『研究社英和大辞典』第 6 版 (2002) による。

²² 本来 *kempt* は古英語 *cemban* の過去分詞。

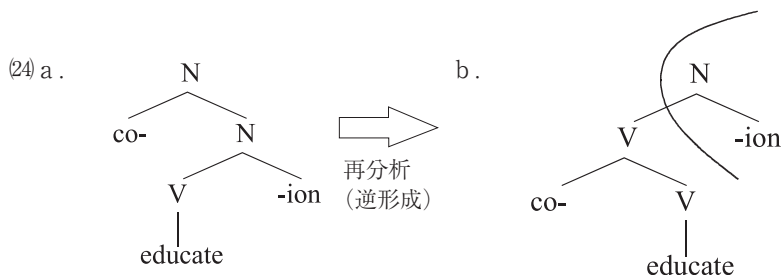
るとは言え、現代の辞書に記載されている場合があるのは、残された un-kempt から逆形成によって、kempt が新たに再生されたからであると思われる（23参照）。

(23) kempt の逆形成による再生



以上のことを踏まえて、coeducation について、次のように考えたい。すなわち、まず (20a) の構造に反映されるような派生によって、coeducation が形成される。その段階ではまだ動詞 *coeducate は存在しないので、*coeducate を構成素と見なす必要はないし、実在しない構成素を仮定する (20b) はむしろ不適當である。しかし、その後、coeducation を構成すると思われる形態素の 1 つである -ion が語全体の接尾辞と認識され、それが切り離されるという逆形成によって、動詞 coeducate と -ion に再分析 (reanalysis) されたものと思われる²³。-ion は名詞を形成する接尾辞であるため、それが切り離されると、動詞 coeducate が誕生する。その意味では、coeducate は本来それ以上分解することができない単一の形態素とみなされるべきものである。しかし、co- は接頭辞であるから、さらに co- と educate に分解されると考えても構わないであろう。

²³ この再分析は実質的に異分析 (metanalysis) でもある。



したがって、coeducation の本来あるべき派生と内部構造は、竝木 (2009: 6) と同様に、(20a) であると思われる。ただし、その後、逆形成によって動詞 coeducate が形成されたことを踏まえ、共時的に捉えれば、(20b) がまったく不適当とも言えないと思われる。例えば、名詞 happiness に un- が付加されて unhappiness が形成されたとする (3b) の構造の不適切さとはまったく事情が異なっている。

6. まとめ

本稿では、coeducation という語の形態素分析で抽出される 3 つの形態素 {co-}, {educate}, {-ion} がどのような順序で結合し形成されたのかを検討しながら、正しい派生と内部構造がどのようなものかという課題を出発点として、様々な観点から考察を加えてきた。

まず、この語の派生には 2 つの可能性があることを見てきた。一つは、education に co- が付加されたもので、もう一つは coeducate に -ion が付加されたものである。一見、どちらも正しいように思われるが、coeducation には 1 つの解釈しかいないため、2 つの構造は本来は必要ないはずである。しかし、だからといって coeducate という語が、さほど一般に普及している語ではないために、大辞典にしか記載がなく、中辞典 (以下) に記載がないことを根拠に、後者の派生を排除することには無理があると思われる。

そこで、本稿では、coeducate が coeducation からの逆形成であることを

考慮し、また語形成の歴史を加味した通時的な観点から見て、本来あるべき派生は前者、すなわち education に co- が付加されたもの、であることを確認した。その後、逆形成によって eoeducate が独立した1つの動詞として認知されるに至った段階では、後者、すなわち coeducate に -ion が付加されたものもまた、それを排除する理由が見当たらないことから、十分に容認される構造と捉えられることを主張した。ある意味、どちらの派生と構造も適切であるということである。したがって、coeducation に想定されうる2つの異なる構造は、逆形成を仲立ちとした、それ自体が一種の「派生」と捉えられるのではないかと思われる。

参考文献

- Brinton, Laurel J. and Donna M. Brinton (2010) *The Linguistic Structure of Modern English*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Fromkin, Victoria, Robert Rodman, and Nina Hyams (2007) *An Introduction to Language*. Eighth Edition. MA: Thomson Wadsworth.
- フロムキン, ビクトリア, ロバート・ロッドマン, ニーナ・ヒアムズ (2006) 『フロムキンの言語学第7版』(緒方孝文・監修) 東京: トムソンラーニング.
- Justice, Paul W. (2001) *Relevant Linguistics: An Introduction to the Structure and Use of English for Teachers*. CA: CSLI Publications.
- 三原健一・高見健一 (2013) 『日英対照 英語学の基礎』東京: くろしお出版.
- 竝木崇康 (1985) 『語形成』(新英文法選書〈第2巻〉) 東京: 大修館書店.
- 竝木崇康 (2009) 『単語の構造の秘密 — 日英語の造語法を探る』(開拓社言語・文化選書〈第14巻〉) 東京: 開拓社.
- 竝木崇康 (2013) 「第2章 形態論」三原・高見 (2013) 所収.
- O'Grady, Willam and John Archibald (2012) *Contemporary Linguistic Analysis: An Introduction*. Seventh Edition. ON: Pearson Canada Inc.
- 大石 強 (1988) 『形態論』(現代の英語学シリーズ〈第4巻〉) 東京: 開拓社.
- 小野隆啓・監修 (2004) 『英語の構造 — その奥に潜む原理 —』東京: 金星堂.
- Siegel, Dorothy C. (1974) *Topics in English Morphology*. Ph.D. dissertation, MIT.
- 寺澤芳雄 (1987) 『英語語源辞典』東京: 研究社.
- Weisler, Steven E. and Slavko Milekic (2000) *Theory of Language*. MA: MIT Press.

『ジーニアス英和辞典』第 5 版(2015) 東京:大修館書店.

『ジーニアス英和大辞典』初版(2001) 東京:大修館書店.

『研究社英和大辞典』第 6 版(2002) 東京:研究社.

『小学館ランダムハウス英和大辞典』第 2 版(1994) 東京:小学館.

『ウイズダム英和辞典』第 4 版(2018) 東京:三省堂.

The American Heritage Dictionary of the English Language. Third Edition.
(1992) MA: Houghton Mifflin Company.

Oxford English Dictionary. Second edition on CD-ROM Version 4.0 (2009)
Oxford: Oxford University Press.